

ソビエト研究

特集 ソ連74年の総括のために

第8号

ソビエト研究所編



東郷 正延 ● 巻頭言

◎特集 ソ連74年の総括のために

歴史 ● 西嶋 有厚	法律 ● 大江泰一郎
政治 ● 加藤 哲郎	外交 ● 菊井 禮次
文学 ● 大木 昭男	芸術 ● 五十殿利治
哲学 ● 北村 実	宗教 ● 廣岡 正久
教育 ● 小島 弘道	

ソビエト研究

第8号

特集 ソ連七四年の総括のために

ソビエト研究所編

白石書店

白石書店

ソビエト研究所 とは！！

ソビエト研究所は、日ソ協会のイニシアティブで89年1月28日に発足した、日ソ両国民の相互理解と友好の発展の観点から、ソ連の国民生活と文化、学術と芸術ならびに経済、社会、政治などの総合的研究の振興と、ソ連に関する正確な知識の普及をめざすわが国唯一の民間研究所です。

◆ 「維持会員」制度のご案内 ◆

ソビエト研究所の趣旨と事業に賛同し、研究所の成果の活用を希望する方々は「維持会員」の制度をご利用いただけます。会費と特典は以下のとおりです。

1. 会費
個人会員 年額 12,000 円 団体会員 1口年額 30,000 円
 2. 定期刊行物の無料配布
『ソビエト研究』（年2回発行）：『ビュレティン』（隔月発行）
 3. 研究会、シンポジウム、講演会などのご案内
 4. 研究所所持の各種資料・情報の供与
 5. ソ連への研究者の派遣の斡旋および来日ソ連人研究者の紹介など
- *** 申し込みは直接ソビエト研究所まで（住所・電話は本誌巻末参照） ***

○●○ 『日ソ経済調査資料』（月刊）も1989年4月号からソビエト研究所刊に移行 ○●○
★☆☆ ソビエト研究所（準）編集『ペレストロイカ』も好評3刷 残部僅少 ★☆☆

ソビエト
研究所

ビュレティン



第19号 1992年2月

- 扉の言葉◆堀江邑一先生の死を悼む……………大崎 平八郎
論 説◆「道標」論の現在……………長縄 光男
ロシア人の目◆私は信じます、ロシアの再生を……………イリーナ・レベデヴァ

第20号 1992年4月

- 扉の言葉◆「独立の新聞」は独立しているか？……………小森田 秋夫
論 説◆新局面を迎えた「ソビエト研究」の課題……………竹森 正孝
特別寄稿◆フォードロフの国際政治における反乱とその源流(1)…ヤコフ・ジンベルグ
ソビエト研究所創立3周年記念シンポジウム◆

「世界史におけるソ連——“74”年の意味を問う」(1)

ロシア革命試論……………倉持 俊一

ソビエト研究

特集 ソ連74年の総括のために

第8号

ソビエト研究所編

白石書店

ソビエト研究 ● 第8号 もくじ

巻頭言

東郷 正延 4

◎特集 ソ連七四年の総括のために◎

歴史 ● ソ連の国家主義的変質の諸要因

西嶋 有厚 6

法律 ● ソビエト法は社会主義法であったか？

——社会主義と「所有」の問題をめぐって——
大江 泰一郎 20

政治 ● ソ連邦七四年の政治的意味

加藤 哲郎 34

外交 ● ソ連外交（理論）の軌跡をどう評価するか

——自己の研究史に関連させて——
菊井 禮次 47

文学 ● 「ソビエト文学」とは何であったのか？

大木 昭男 62

美術 ● ロシア・アヴァンギャルド再評価の軌跡から

五十殿 利治 81

というように表現するのは、正確ではなからう。この表現は、それが単なるレトリックでないとするれば、生産手段の社会化（「国有化」と「国家的所有権」カテゴリーの成立とを等置したままこれを否定するものであって、それ自体は、法律的な所有権概念の没却または法律的概念と経済学的概念の混同に起因するものと思われる。田中「社会主義・市場・私的所有」『市場経済——その理論・歴史・政策』龍谷大学経済学部創立三〇周年記念論集刊行委員会、一九九一年、とくに三九頁以下参照。

(15) 『マルクス・エンゲルス全集』第四巻、四八九頁。

(16) 川島武宜『所有権法の理論』岩波書店、一九四九年、二五—二六頁。なお「所有」(権)概念については、さらに藤田勇・水林彪「所有・占有」の項目、『大月経済学辞典』五一七頁をも参照。

(17) 藤田、前掲、第二章参照。

(18) S. V. Iushkov, *Istoriya gosudarstva i prava SSSR*, Ch. 1, M., 1961, S. 500.

(19) この規定は、筆者の「レグルマン(行政規則)型」法秩序としてのロシア・ソビエト法という位置づけと一致する。前掲拙著、六頁参照。

(おおえ・たいいちろう 静岡大学)

現代の哲学と政治

新刊

岩崎允胤著

激動の世界の中で
未来をめざして
崩壊したソ連指導部の理論と政治を鋭く批判、説明！

「新しい思考」と史的唯物論

岩崎允胤著

第14回「野呂栄太郎賞」
受賞二論文収録！
四六判定価2300円

四六判定価2075円

平野義太郎著作

についての書評集

平野文庫編 付別冊 平野義太郎著作目録
マルクス主義法学の先駆者平野の
業績を著名研究者が解明する。
定価8240円 310

現代日本文化論の研究

——天皇制イデオロギーと新京都学派——
鯨坂真／上田浩／黒田治夫／釘真 保守派文化論の本質を
和則／山川学 定価3090円 310 鮮やかに解明!!

千代田区神田 白石書店 03(3291)7601
神保町1-28 振・東京2-16824

千代田区神田 白石書店 03(3291)7601
神保町1-28 振・東京2-16824

政治

ソ連邦七四年の政治的意味

加藤 哲 郎

一 「ソ連社会主義」への追悼文はまだ早いのか？

「ソビエト・社会主義・共和国・連邦」という実験国家が解体して、一年になる。二〇世紀世界の一方の極にあり、かつては日本の知識人・青年の希望を集めたこともある国家は、もはや存在しない。その歴史的意味については、拙著『ソ連崩壊と社会主義』（花伝社、一九九二年）などで論じた。しかしその後、歴史の真実は次々に暴かれてきている。

一九九二年三月一日付『ニューヨーク・タイムズ』紙は、

旧ソ連共産党中央委員会文書館文書の行方について報じた。アメリカ議会図書館のソ連専門家ジェームズ・ピリントンによると、アメリカ議会図書館が、ロシア共和国に協力して史料のカタログをつくり、マイクロフィルム化しようとしている旧ソ連共産党中央委員会文書館文書は、七、五〇〇万点にのぼる。そこには、共産党地方指導部から中央委員会への膨大な報告書や秘密世論調査記録のほか、これまで未発表のレーニンの書簡四、〇〇〇通や、スターリンのもとに届けられた種々の秘密報告書、コミンテルン指導部会合の速記録などが含まれており、時間をかけて整備されたのちに、世界の

研究者に公開されるといふ (Russians Get U. S. Help On Baring Soviet Files, New York Times, 11 March 1992)。

そこから、どのような新事実がでてくるのだろうか？ これまで公表できなかった性格のものであるから、「社会主義の復権」に寄与するものではないだろう。私は、昨年夏、「ベルリンの壁」崩壊でソ連より一足先にアクセス可能になった、旧東ドイツ社会主義統一党中央委員会文書館文書の一部を、閲覧する機会をもった。そこには、手書きやタイプ印刷で残された多くの党内連絡文書があった。さまざまな活動指令や名簿類が含まれていたが、党内人事と党財政に関わるものも多かった。より具体的にいうと、例えば、ある地区の党幹部から別の地区の党委員会へ「○○同志が××の任務で行くので援助して欲しい」という要請文や、党員の経営する出版社に平和運動に関する書籍刊行での利益の党への献金を強要する手紙と、それは通常の市民として得た利益で党費は別にちゃんと払ってあると抗議する民間小出版社社長の反論、といったものだ。ソ連邦の文書にも、同様のものが含まれているだろう。「ソ連社会主義への幻滅」を、いっそうあおるものとなるだろう。

私は、五月に刊行した『ソ連崩壊と社会主義』で、特異な

世界観政党であるレーニン・コミンテルン型共産党による政治支配の悲劇として、また、民族・エスニシティ問題を階級闘争に従属・還元させた「科学的社会主義」のもたらした悲惨として、ソ連邦の崩壊を論じた。これから次々にでてくるであろう新事実のなかには、これまでの私たちの想像を絶するものが、まだまだ含まれているだろう。未発表のレーニンの手紙のなかには、晩年のスターリンとの「最後の闘争」や、トロツキーとの提携を示す資料もあるだろう。しかしまた、レーニンと革命的テロリズム・強制収容所とのつながりを示す文書も、含まれているかもしれない。こうした意味では、ソビエト・ロシアの政治過程は、これからようやく本格的に研究しうることになる。

情報独占と秘密主義のヴェールでおおわれた国家は崩壊したが、そのヴェールがようやく取り払われ始めたこの局面で、ソビエト研究の専門家は、どう論じるのだろうか？ ペレストロイカ期から始まるソ連歴史学の変貌については、すでにR・デーヴィスのサーヴェイ(『ペレストロイカと歴史像の転換』岩波書店、一九九〇年)やR・コンクエストの一九三四年キーロフ事件についての再論(『誰がキーロフを殺したか』時事通信社、一九九二年)が、わが国にも紹介された。

シベリア抑留や北方領土についての新史料も、次々に公表されてきている。無論、日本の研究者の著作・論文も、多数発表されている。

そのなかで、私は、わが国のソビエト政治研究をリードしてきた一人である浜内謙のエッセイ「プレトニヨフの選択」

〔『UP』一九九二年六月号〕を、興味深く読んだ。

全体の論旨は、トロツキーの『裏切られた革命（ソ連とは何か、そしてそれは何処に行きつつあるか？）』（一九三六年）新訳刊行に寄せて、「歴史を究極において動かすものは、国家、支配者ではなく、社会、被治者であるという、マルクスの歴史観への確信」がトロツキーの当時の「強靱な分析的・総合的精神」での資本主義復活の可能性を含む分析を可能にしたとして、「スターリン主義のプリズム」を離れての「過去の理性的対話」の必要を説いたものである。「レーニン像解体、性急なレーニン批判、十月革命とその後の歴史の全面否定をもって、真の歴史批判のための歴史批判と同一視できないということ、それらは歴史批判のための精神的前提を用意する過渡的現象である」と。

「過去に理性的の光をあてることなしには、未来を理性的に語ることはできない」こと自体は、私もその通りだと思ふ。

トロツキーの復権にも、異存はない。私のまわりのソ連研究者にも、浜内氏と似た心境の人は少なくない。本誌の読者にも、共感する人は多いだろう。問題の所在さえつかみかねているらしい自称「真の正統派マルクス主義」の無残な老醜——たとえば、中村静治『現代世界とマルクス理論の再生』（大月書店、一九九二年）——に比べれば、その学問的誠実さは疑うべくもない。

しかし、「スターリン主義のプリズム」と同様に「レーニン主義のプリズム」もあつたのではないか？ 「ボリシェヴィズム」の「例外的手段」の集積が「スターリン主義への道を拓いた」ことは浜内も認めているが、その「手段の自己目的化」は、革命前ボリシェヴィキの「前衛党」理論や、革命直後の憲法制定議会解散と無関係であろうか？ マルクス、エンゲルス、レーニン、トロツキー、ブハーリン、ドイツチャー、カールの「プリズム」も、やはり歴史により再検証されなければならないのではないか？

巷に溢れる「社会主義・共産主義の終焉」「資本主義・市場原理の勝利」は、たしかに「状況の変化に合わせた過去についての性急な価値判断」であるかも知れない。しかし、「社会主義の理想に最後までこだわったゴルバチョフの退陣が、か

ならずしも理想そのものの終焉を意味しない、と想定できる歴史の文脈」をあげて、「歴史の底流に耳をすますなら、将来、新しい社会主義を模索したゴルバチョフの理想を継承する『ペレストロイカの世代』が政治の表舞台に登場し、かれの理想を復活し、かれの限界を突破して、それをさらに前方へ押しすすめる可能性は否定できない、と思う。ソ連社会主義に追悼文を書くのはまだ早い」という浜内の見解には、私は、あまり説得力を感じなかった。そこからは新たな「プリズム」が生まれるのではないか、という危惧をもった。無論、「プリズム」自体は研究主体の立場と問題設定に依じて、いかなる研究でも不可避である。それならばむしろ「ソ連社会主義は死んだ」という問題設定から出発して「社会主義の理想」と「民主主義」の再結合を考えるべきではないか？ その理由を、以下、二つの点で述べてみる。

二 日本の学生は「ソ連社会主義」をどうみたか？

今日の旧ソ連・東欧では、ロシア革命以降七四年の歴史は「全体主義」とくくられることが多い。私は「国家主義的社会的社会主義」としてきたが、ここではさしあたり「現存した社会

主義」としておこう。浜内は、トロツキーに従い「自由と民主主義を欠くとき、それは……社会主義ではない」という。「新しい社会主義」は、「スターリン体制」と対置される民主主義的なものとされる。しかし、七四年の「ソ連社会主義」「現存した社会主義」の伝統のなから、ロシア革命期ポリシェヴィキとゴルバチョフのみを抽出して「自由と民主主義」を伴う「新しい社会主義」に接合することは、果たして可能なのだろうか？

浜内という「歴史を究極において動かす被治者」についていえば、一九八九年の東欧と九一年のソ連において、民衆自身がある選択をおこなったことは、否定できないだろう。私は「市民革命」「民主革命」と命名してきた。一九一七年の革命を深部において達成したのも民衆であり、その結果としての国家主義体制を葬りさつたのも民衆であった。たとえば、これから半世紀なり一世紀なりたつて、もしもロシアの民衆がなんらかの「新しい社会主義」を選択したとして、それは「一九一七年十月」の伝統の継承として意識されるのであろうか？ 再びレーニンとは「復権」するのだろうか？ そのさいの「新しい社会主義」とは、いったいどのようなイメージなのだろうか？

溪内は「ソ連『社会』」は、それが七四年にわたり生きつづけた社会主義の歴史を『体制』の崩壊とともに簡単に忘れ去るものであろうか」と問題を立てている。他方で「世界経済から孤立したところではなされる社会主義建設のいかなる企ても結局は失敗に終わるだろう」という「トロツキーの」予言はいまや実証された」とも書いているから、それは日本にも無関係ではないだろう。いや、地球的規模での「社会主義の理想」と「自由と民主主義」の接合がなければ、いかなる意味でも「復活」は不可能だろう。その「反面教師」ではないなにかしかを、「ソ連社会主義」の歴史は、はたして提供しうるのだろうか？

私は、ここ数年、勤務先の一橋大学で、毎年四月の政治学講義開講時に、学生を相手にした意識調査をおこなってきた。講義が始まってからでは、私の説のバイアスがかかるので、第一時間目のオリエンテーションで実施し、その結果は、これまででもいくつかの著書で用いてきた（『社会主義と組織原理』窓社、一九八九年、『社会主義の危機と民主主義の再生』教育史料出版会、一九九〇年、など）。一九九二年四月は、何人かの政治学者の協力で、私の勤務する一橋大学（商・経済・法・社会学部二九六入）以外に、関東学院大学（工

学部七六入）、工学院大学（工学部一六二入）、三重短期大学（法政・経商コース一五〇入）でも、同じ調査を実施した。そこには、社会主義・共産主義と民主主義に関する設問も含まれているので、そのいくつかを紹介しよう。

「民主主義」「資本主義」「自由主義」「社会主義」「共産主義」「全体主義」の六つのイデムをあげて、「よい」「時と場合による」「よくない」で答えてもらおう設問での本年度の分布は、どの大学でも「よい」と回答する率が民主主義√自由主義√資本主義√社会主義√共産主義√全体主義の順で並んだ。これは例年通りで、民主主義・社会主義・共産主義については、次のようになった。一九七三年の「日本国民」とは、文部省統計数理研究所『日本人の国民性』調査のデータで、一橋大学生については、ペレストロイカ前の一九八五年からのデータも入れておく。

「あなたは以下の『主義』について、どう思いますか？ あなたの考えに一番近いものを、それぞれ一つだけ選び、○をつけてください」（単位パーセント）

「民主主義」	よい	時と場合による	よくない	わからない
日本国民一九七三年	四三%	四六%	二%	一七%

一橋学生	一九八五年	七三	二三	二	二
	一九八九年	七七	二〇	〇	一
	一九九〇年	七九	二一	〇	〇
	一九九二年	六五	三一	二	二
関東学院	一九九二年	八一	一五	〇	四
工学院大	一九九二年	七二	二〇	一	六
三重短大	一九九二年	六三	二九	一	七
「社会主義」		よい	時と場合による	よくない	わからない
日本国民	一九七三年	一四%	五一%	一六%	一九%
一橋学生	一九八五年	一一	七一	九	九
	一九八九年	四	七六	一一	九
	一九九〇年	五	七二	一二	一一
	一九九二年	八	六五	一六	一一
関東学院	一九九二年	七	五〇	一九	二四
工学院大	一九九二年	三	五四	二八	一五
三重短大	一九九二年	三	五九	二三	一五
「共産主義」		よい	時と場合による	よくない	わからない
日本国民	一九七三年	五%	三四%	四五%	一六%
一橋学生	一九八五年	一〇	五五	二三	一三
	一九八九年	四	四三	三五	一九

一九九〇年 二 四三 三六 一九
一九九二年 三 四四 三七 一五
関東学院一九九二年 五 二八 四一 二五
工学院大一九九二年 一 二六 四一 三一
三重短大一九九二年 一 三五 三九 二六

ここから、「民主主義」の定着に比しての「社会主義」「共産主義」の凋落、一九七三年当時の国民一般に比しても八〇年代以降の学生の「社会主義」支持率「よい」が低下していること、それはとりわけ八九―九二年の拒否率「よくない」増加に現れていること、社会科学系学生の一橋大学より、理工系の関東学院・工学院や、地方の女子学生中心の三重短大では拒否率が高くなること、などがわかる。共産主義については、「社会主義」以上に支持率が低くなり、拒否率が倍増する。

これを、別の角度から、日本の社会体制として何を望むかを回答させると、次のような回答をえた。この設問は、日本生産性本部が新入社員に対して毎年実施している「働くことの意識調査」を転用したもので、一九七〇年代に割はいた「社会主義」志向の若者意識の衰退と、最近の学生意識は軌を一にしている。なお「社会主義体制」支持者がわずかなが

ら残るが、関東学院・工学院・三重短大では「現体制」支持が半数近くを占める。

問い「日本社会は資本主義社会といわれていますが、あなたはどのような社会を望みますか？ 次のなかからひとつだけ選んで○をつけてください」（パーセント）

	現体制	改良された体制	社会主義体制
日本青年一九七〇年	二四%	五一%	七%
一九七四年	一七	五七	一〇
一九八〇年	三七	三五	四
一九八五年	五〇	二四	二
一九八八年	四八	二四	二
一九九〇年	四二	三〇	一
一橋学生一九八九年	三一	六七	二
一九九〇年	二三	七四	三
一九九二年	二四	七四	二
関東学院一九九二年	四六	五三	一
工学院大一九九二年	五〇	四九	一
三重短大一九九二年	四五	五二	三

問題は、こうしたアンケートで学生が「社会主義」として

意識しているのは、これまでも今日でも、圧倒的に「ソ連」であることである。「ソ連」こそ日本の若者の「社会主義」イメージをかたちづくってきたものであり、「現存社会主義」への反発・批判こそ「社会主義」拒否意識の中核にあることが、以下の回答から知れる。「社会主義」イメージから強いてポジティブなものを見いだそうとすれば、「平等」である。だがこの「平等」も、第六位以下に「悪平等」「画一的」「統制」などが続き、必ずしもプラス・イメージではない。そして、それとは対照的にポジティブに受容される「民主主義」とは、なによりも「自由」である。ここでは点数は省略するが、いずれの調査でも、「社会主義」の第一位「ソ連」、民主主義」の第一位「自由」は、二位以下を圧倒的に引き離している。

問い『社会主義』『民主主義』という言葉から、あなたが連想する言葉を、連想が浮かんできた順序にしたがって、いくつでも、3個以内書いてください」（連想の順序にしたがって点数をつけ、加重式で加算したもの）

社会主義	第一位	第二位	第三位	第四位	第五位
一橋学生一九八五年	ソ連	マルクス	レーニン	共産主義	中国

一八八九年	ソ連	平等	中国	マルクス	レーニン
一九〇〇年	ソ連	マルクス	平等	計画	東欧
一九二二年	ソ連	マルクス	平等	レーニン	空想的
関東学院一九二二年	ソ連	平等	貧困	中国	—
工学院大一九二二年	ソ連	平等	中国	独裁	貧困
三重短大一九二二年	ソ連	平等	崩壊	中国	貧困

民主主義

一橋学生一九八四年	自由	選挙	平等	平和	議会
一九八九年	自由	平等	選挙	アメリカ	国民主権
一九九〇年	自由	選挙	平等	アメリカ	議会
一九九二年	自由	選挙	平等	多数決	議会
関東学院一九九二年	自由	選挙	日本	アメリカ	国民主権
工学院大一九九二年	自由	国民主権	選挙	アメリカ	平等
三重短大一九九二年	自由	平等	平和	選挙	国民主権

日本で「社会主義」と「民主主義」を結びつけるには、「ソ連」の「悪平等」を否定したうえで、「自由」と「平等」を結びつけることが必要なようである。

もう一つ、日本の青年とモスクワの青年を比較できる、次の設問にも注意しておこう。

問い「あなたは、次のような言葉をどのように受けとめますか？ ひとつだけ選んで、○をつけてください」（パーセント、モスクワの数字は、Moskow News Weekly, Jan. 14, 1988で、東欧革命後のソ連で急速に「社会主義」イメージが悪化した時期のもの）

「競争 (competition)」	肯定的	否定的	わからない
一橋大学生一九九二年	七三%	一五%	一二%
モスクワの青年(二〇—二九歳)	八六	七	七
モスクワ市民平均一九九〇年	七四	一〇	一六
「利潤 (Profit)」	肯定的	否定的	わからない
一橋大学生一九九二年	六四	二〇	一六
モスクワの青年(二〇—二九歳)	六二	二四	一四
モスクワ市民平均一九九〇年	五三	二八	一九
「計画 (Plan)」	肯定的	否定的	わからない
一橋大学生一九九二年	七六	九	一四
モスクワの青年(二〇—二九歳)	四〇	四八	一二
モスクワ市民平均一九九〇年	四二	四二	一六

ここからわかることは、「競争」や「利潤」については、ソ連の若者も日本の学生も、大きな意識の差はないことである。むしろ目立つのは、日本の学生の「計画」肯定意識の高さと

モスクワの青年たちの反発である。日本の学生たちは、「競争」や「利潤」よりも高い割合で、また一九九〇年モスクワのあらゆる階層よりも明確に、「計画経済」を支持している。いうまでもなく「行政指導型日本経済の成功」が、その背景にある。とすれば、「新しい社会主義」は、「計画」を可能にする混合経済、旧ソ連型でも現代日本型でもない経済システムとして、示されなければならない。その時、例えばレーニンの「国家資本主義」ないしソ連の二〇年代ネップと、スウェーデンやデンマークの歴史的経験と、どちらが青年たちに希望を与え、未来に開かれたイメージを与えうるだろうか？ 少なくとも日本においては、「ソ連社会主義」は——それがどうよばれようと——「社会主義の理想」「新しい社会主義」にとつては「反面教師」以上のものにはなりえない、と私は思う。

三 『收容所群島』と実質労働時間・自由時間

スターリン粛清で「病死」とされてきた日本人犠牲者が実は「銃殺」だったと明らかにされても（『赤旗』一九九二年五月一九日）、レーニンの「富農の首を絞めよ」という赤色テロ

ル秘密指令ができて（『朝日新聞』六月一八日）、もはやだれも驚かなくなった。飛行機事故や原発事故が隠されてきたことは、以前から知られていた。「不足の経済」の実態は、私自身も体験した。経済統計のいい加減さも、ある程度は知っているつもりだった。しかし、『読売新聞』一九九二年五月二五日の「物不足のはず、旧ソ連人口実は四億人」「地図にない町、統計されぬ人、『余計者』一億二千万人」「国家犯罪の收容者列島」という記事には、さすがに驚いた。二億八、〇〇〇万人の公式人口の他に一億二、〇〇〇万人（日本の総人口！）の囚人が強制收容所にいるという『アガニョーク』誌一九九二年四月号のセンセーショナルな記事の翻訳だが、実はこれは『アガニョーク』編集部が「エイプリル・フール」をそのまま事実として報じた大誤報だったとか。もつともエリツインは、六月に、ベトナム戦争でのアメリカ兵捕虜が強制收容所でまだ生きていると示唆した。

『読売新聞』の記事に驚いて、改めて、A・ソルジェニツィン『收容所群島』を読み返した。ソルジェニツィンとして、その全貌を知りえたはずはない。規模については「数百万」という言い方が多く、一九三九年について、人口一億五、〇〇〇万人の一割、一、五〇〇万人としている（木村浩訳、新潮

文庫版、⑤四三頁)。無論これでも、充分に驚異的数字だ。

彼は、「群島」がソビエト社会にビルトインされることで形づくられる「娑婆の生活の特徴」を、次の様に挙げていた。

①絶えざる恐怖、②住居登録制度、③秘匿性・不信、④全面的無知、⑤密告制度、⑥生存方法としての裏切り行為、⑦墮落、⑧生存方法としての虚偽、⑨残酷、⑩奴隸的心理(新潮文庫版、④四二〇頁以下)。これらは、正当な指摘だと思ふ。私自身のかつての東独での生活体験や、私の調査してきた元東大医学部助教国崎定洞の肅清期の状況とも、合致する(加藤『東欧革命と社会主義』『ソ連崩壊と社会主義』参照)。

K・マルクス『資本論』が「資本主義的蓄積の一般的法則」としてあげる、労働者の①貧困、②労働苦、③奴隸状態、④無知、⑤粗暴、⑥道徳的墮落と対比したくなる。この「収容所生産」は、ソ連七四年の歴史で、どういう意味をもつのか? ソビエト・ロシア研究者は、この『収容所群島』を、どれだけ分析しえたのであろうか?

『群島』の全貌が明らかになるのは、おそらくこれからのことであろう。しかしそれは、「ソ連社会主義」のたんなる「恥部」なのだろうか? 強制収容所については、日本人のシベリア抑留記録を含む多くの体験記があるが、系統だった

全体的研究は少ないようだ。政治犯には注目されるが、じつさいには刑法第五八条などが政治的抑圧による労働奴隸化の口実・根拠になった(たとえば「富農」とされた数百万人の農民)。R・メドヴェージェフ『共産主義とは何か』(石堂清倫訳、三一書房、一九七三年)は、さすがに「スターリンの監獄と収容所の物語は、たぶんわが国の歴史のうち、もっともおそろしいページである。……とるにたらない挿話と考えるのは笑うべきことである」と問題の重要性を強調しているが、当時はいくつかの体験記から「何百何千の収容所」の「一昼夜に一〇時間、時としては一三一―一六時間の、おそろしく過重で、人をおろそかにする労働」の存在を指摘できたにすぎない(上巻、四五三頁)。R・コンクェスト『大粛清』は、「労働収容所はスターリン体制全体の大黒柱の一つであった」「数百万の奴隸労働者は、重要な経済的役割を演じていて、事実上ソビエト経済の正常な一構成部分と認められるようになっていった」と正当にも指摘したが、その規模については、一九三八年で八〇〇万人と推計した(片山さとし訳『スターリンの恐怖政治』三一書房、一九七六年、第一〇章)。

それは「ソ連社会主義」にビルトインされた一つの生産様式ではなかったか? このような社会を、「歪められた労働

者国家」や、「初期社会主義」のカテゴリでくりうるのであろうか？ 「資本主義と社会主義との中間段階にある矛盾を含んだ社会」「過渡期社会」とさえ言いうるのだろうか？

私は、疑問を禁じえない。その起源がレーニン時代にはじまることは、ソルジェニツィンやコンクエストが明らかにしている。一九一八・一九年にチェーカー（非常委員会）により裁判抜きに銃殺された者八、三三九人、摘発された「反革命」組織四一二、逮捕者八万七、〇〇〇人という数字（『収容所群島』①四三九頁）は、「例外的手段」であり、とるにたらないものだろうか？

ソルジェニツィンは、『収容所群島』で「余計者」たちにより建設されたシベリア鉄道から白海・バルト海運河にいたる膨大な「公共事業」を地図にしているが、そこでの労働は、エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』も、日本の『女工哀史』の世界も及ばない、全人格的支配と二四時間拘束の世界である。彼は、農奴制と収容所労働を比較し、「自分たちには何の得にもならず体力を消耗させる賦役労働へ出る」共通性とともに、収容所労働が農奴制よりも苛酷であり、①農奴には日曜日・祭日があったが囚人にはなかった、②農奴には馬や衣服・食器の個人的所有が許されたが囚人にはな

かった、③農奴は家族と共にくらすせたが囚人は半永久的に家族と引き離された、④農奴は定住できたが、囚人は幾度も護送されて地の果てに送られたと述べ、「公正な比較に耐えるものは古代東洋の奴隷制度以外にない」という。そして、一九世紀の農奴の売買が「決して百万単位にはならなかった」のに、「ロシアの新聞や文学は憤慨してこれを非難した」こととの対比で、「一九」三〇年代、四〇年代、五〇年代にはわが国には文学はなかった」と断じる。

ここでの問題は、ソルジェニツィンやバステルナークのロシア主義思想や文学的評価ではない。彼らが生命をかけ究明した独特の「生産様式（ウクラード）」を構造的にビルトインして七四年間実在した「社会構成体」を、どのように特徴づけるべきかである。

好運にして囚人にならなかった普通の労働者・農民「ソビエト市民」にとって、「ソ連社会主義」とは何だったのだろうか？ 私は、最近主題としている「自由時間の政治学」——現代日本の企業社会、過労死の世界史的位置づけ——との関わりで、旧ソ連の残業や「土曜労働」などを含む一般労働者・農民の実質労働時間を知りたいと思っているが、なかなか信頼できる研究・資料を入手できなかった。帝制ロシア

時代については、荒又重雄『ロシア社会政策史』（恒星社厚生閣、一九七一年）から、ある程度を知ることができた。ソビエト・ロシアについて、辻義昌『ロシア革命と労使関係の展開』（御茶の水書房、一九八一年）、塩川伸明『社会主義国家と労働者階級』（岩波書店、一九八四年）、同『ソビエト社会政策史』（東京大学出版会、一九九一年）、大津定美『現代ソ連の労働市場』（日本評論社、一九八八年）などを読み、ようやく岡田裕之「労働者国家の労働日」（『経営志林』二二卷三・四号、一九八四・八五年）にゆきついた。そして、さまざまな論文や新聞記事などの断片的記録からの推定ではあるが、ロシア労働者の実労働時間が革命による「八時間労働」宣言によって帝制期より短縮されたにしても、日本を除く先進資本主義に比して画期的性格をもつものではなかったこと、一九二七年の「七時間労働」宣言が大量失業や交代制導入と結びついたものだったこと、自立的労働組合の弱さ（この点は日本と共通）が国家・経営者の恣意的時間管理を許した点と、「土曜労働」や未払い残業が日本の「サービス残業」同様恒常化していたこと、「計画経済」の機能不全、原材料未着による労働力遊休と「突貫作業」とよばれる集中残業が「ソ連社会主義」の特質をなすこと、などを知ることができた。

詳しくは別稿で論じるが、ここで指摘したいのは、「ソ連社会主義への追悼文はまだ早い」と問題を設定することでおこりうる「プリズム」の偏差である。つまり、岡田は「社会主義における絶対的剰余価値の生産」という仮説をたてることで、法定労働日・労働時間や公式統計では見えない残業や土曜・日曜労働を含む「労働者国家における労働日」という問題設定から、不払い剰余労働の実態に迫ることができた。私は、岡田の理論モデルの全体的当否はどうあれ、旧ソ連研究ではこの種の「問題設定」が決定的だと思う。したがって、日本の旧ソ連研究者には、新たな問題設定からの「ソ連社会主義」七四年の具体的研究、実質労働時間と自由時間、労働環境・労働生活、女性の社会的地位、家族・教育・精神生活の実態などについて、明らかにしてくれることを期待する。また、「計画と市場」「国家的所有と社会的所有」についての抽象的理論よりも、「国家社会主義」「国家的奴隸制」と「ノーメンクラトゥーラ支配」の現実的連関を分析してくれるよう望む。

「ソ連社会主義」は死んだ。だがそれは、現実存在したかゆえに、ようやく学問的検討の対象となった。その歴史的评价は、コロンブスが生涯を通じてインドと思ひ込んでいた

「新大陸発見」の意味と同じように、変化せざるをえないであろう。レーニンとボリシェヴィキ、ロシア革命の場合はどうか？ それは、未来の人類が決めることである。

(かとう・てつろう 一橋大学・政治学)

あるアンケートから

今年三月、モスクワで開かれた「コンドラチエフの業績と現代」と題する国際学術コンファレンスの席上、参加者に対してロシアの経済危機にかんする簡単なアンケートが行なわれた。三日間の会期中に集まった回答は二一〇人分にのほり、そのうち八人が外国人(西欧)であった。

現在の危機について、主要原因の順位づけを問うた結果は次のとおりであった。

極度の軍事化	全体で	うち外国人
経済構造の立後れ	一位	三位
超独占・競争閉息	二	一
技術工程の遅れ	三	六
	四	三(同順)

人材養成の欠陥	五	九
経済利害の破壊・奇食	六	七
全体主義政治体制の破壊	七	五
経済社会政策の失敗	八	二
連邦解体・経済連関寸断	九	四
過度の対外債務	十	八

もとより綿密なアンケートではなく、とくに外国人の数が少ないので、確定的なことはいえない。しかし全体として内外の専門家(約七〇%が修士以上)の考えが示されているものとすれば、おもしろい傾向がある。危機の要因として、ロシア(旧ソ連)国内の専門家はもっぱらソ連の経済構造そのもの、およびその要素を上位に挙げているのに対し、外国人専門家はそれと同時にこの間の政府の経済政策、およびその結果も問題にしている。この点が対照的である。

ロシアの多数の経済学者が近年のソ連のロシアの政策に関与してきたことの現れかもしれない。しかし、現在のエリツィン・ガイダールの経済政策に対しては、会議の席上でも会場周辺でもかなり批判的な意見が多く聞かれた。

(T. A. N.)